

124

2019 SPRING

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 24

美術館の正面や中庭に面したところでみられる
大きなガラス面は、一枚でなく複数のガラスから作られる。
三角柱のように組まれた細長いガラスは、強度をもたせる
実用的な役割と、館内各所を彩るおなじみの
三角形模様と同様、装飾としての機能も果たしている。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

江戸時代の新風

特別展「江戸の奇跡・明治の輝き—日本絵画の200年」によせて

八田 真理子(学芸員)

このたびの特別展は、江戸時代中後期から明治時代にかけての日本絵画を取り上げています。とくに、この時期に次々と生み出された新たな画風に焦点を絞ることとしました。それら作品の放つ清新な煌めきを「奇跡」「輝き」の語に託して、本展は名付けられています。ここでは展覧会紹介として若冲、応挙、為恭の3名を取り上げながら、様々に生み出された「新しさ」をみていきたいと思います。

新風から新風をつくる —若冲と南蘋画風

18世紀において様々な個性の画家が現れた要因の一つに、8代将軍・徳川吉宗の政策があります。例えば、吉宗による洋書輸入の一部解禁は蘭学の興隆をもたらして洋風画の発展へと繋がるなど、日本絵画に大きな刺激をもたらしました。絵画史上もう一つ重要な出来事として、沈南蘋の来日が挙げられるでしょう。吉宗が招聘し、享保16(1731)年より2年間長崎に滞在した清朝の沈南蘋は、この頃の日本画家たちに最も大きな影響を与えた中国人画家であるとしても過言ではありません。南蘋画は緻密な描写に加え、白色を量感表現としても華やかに用いる鮮やかな着彩が特徴で、日本では新鮮なものとして大いに流行しました。

この新しい画風を取り入れ、自らの個性を研ぎ澄ませていった画家に伊藤若冲(1716—1800)がいます。若冲は京都・錦市場の青物問屋の主人でしたが、40歳で弟に家督を譲ってからは絵事に打ち込み、《動植綵絵》(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)に代表される華麗な花鳥画を描きました。本展のメインビジュアルにもなっている図1《花卉双鶏図》は花木に囲まれたつがいの鶏と小禽のいる春の情景を描いた華麗な作品で、《動植綵絵》以前に描かれた初期の鶏図として注目されます。とりわけ陽に透けるような木蓮の花弁が印象的ですが、輪郭線を引かず白色だけによる着彩方法は、南蘋画に着想を得たものとみられます。《動植綵絵》になると、この白の用法は裏彩色や盛り上げが併用される一層手の込んだものとなり、そのような装飾性の強まりにこそ若冲の個性をみることができるようでしょう。若冲の新味ある画風は、沈南蘋という新しい刺激によって生まれ得たものだったのです。



図1:伊藤若冲《花卉双鶏図》個人蔵



図2:円山応挙《写生図》(14図のうち) 和泉市久保惣記念美術館蔵

新風から伝統へ 一応挙の写生画風

続いて、「新しさ」の変化に注目してみましょう。若冲の画風について、その追随者はいましたが後世に長く続いた形跡はみられません。同じ頃の京都で活躍した円山応挙(1733—95)は、新たな画風を作りあげた点では若冲と同じですが、画派を形成して自身の画風を後世に伝えたという点で異なります。応挙は農家の家に生まれましたが、玩具屋に奉公に出たためにオランダ銅版画や蘇州版画といった舶来品に囲まれた環境でそのキャリアをスタートさせることになりました。風景画を凸レンズ越しに見る舶載玩具「眼鏡絵」の制作経験を通して、西洋由来の遠近法や陰影表現を学びます。そのような経験によって独自の空間表現を得たとされ、さらに写生に基づきながら、写実的と評される画風を形成していきました。応挙画はその平明な親しみやすさからも人気を博し、「絵は応挙の世に出て、写生といふことのはやり出て、京中の絵が皆一手になったことじや」(上田秋成『胆大小心録』)と皮肉交じりに述べられたほど非常な流行をみました。

さて、応挙が画派を拡大していく過程を教えてくれる作品が図2《写生図》です。応挙の写生図には対象を目の前にして描かれたと思われる一次写生、それを浄写した二次写生があり、さらにその二次写生が円山派内で粉本(お手本)として書き写され受け継がれていました。図2では、角度を変えたり、輪郭を確認するように線描されたり、あたかも応挙が本物の兎を目の前にスケッチしたかのようですが、応挙の他の写生図中に全くの同図様がみられるので、これは二次写生、あるいは何本か複製された粉本のうちの一つであると思われます。左下には「円山蔵」との墨書があることから、応挙か弟子のいずれの作にしても、円山派内で共有されたものであることは間違いなさそうです。応挙は粉本としての写生図を弟子内に共有することで自身の新しい画法の継承を可能にし、命脈を保つための一つの軸としました。

伝統から新風をつくる 一為恭の復古大和絵

円山派にも言えることですが、画派が伝統となればやがて初めの新鮮さが失われるのは免れ得ません。そこで、より古い時代に遡る学習をおこない、自己の個性を作り上げた画家が復古大和絵の絵師・冷泉為恭(1823—64)です。為恭は、京狩野の家に生まれながらも大和絵の道に進みます。それも同時代の土佐派や住吉派などではなく、平安時代の作品へと回帰していったのです。為恭は若い頃から社寺に蔵される古画の模写を重ね、さらに有職故実を学ぶなど、深い理解を目指していました。国学者の長沢伴雄はそんな18歳の為恭を「いとおもしろき志ある男」と述べています。

為恭画の魅力は、高級な顔料をふんだんに用いた華やかさもさることながら、図3《公事十二ヶ月図短冊》にみられる洗練された近代的感覚にもあるといえるでしょう。本作は12枚の短冊に12か月の年中行事を描いたもので、平安絵巻を思わせる人物表現には為恭の王朝趣味が伝わってきます。しかしながら、上部の余白を空間として巧みに用いた感覚は近代日本画への繋がりを感じさせるものです。このような為恭の瑞々しい個性は江戸時代にあって一際精彩を放っています。

本展は100~300年ほど前の「新しさ」をお見せするものですが、これらの作品に対して、2019年の今なお澁刺として新しい—そんな感想を皆様を抱いていただけるのではないのでしょうか。紙幅の関係で明治までのご紹介は叶いませんでしたが、展覧会ではより様々な「新しさ」に出会っていただけるはずです。



図3: 冷泉為恭《公事十二ヶ月図短冊》(一部) 1854年 個人蔵

ミュージアムで夢を語る 「授業展—図工の時間・美術の時間—(仮称)」

岡本 裕子(主任学芸員)

当館では、学校教育機関とともに「学校と美術館の連携委員会」を組織し、子どもたち一人ひとりが文化的で豊かに生きていくことを願って、双方が連携したプログラムを実施している(図1-4)。2017年度に開催したシンポジウム「学校×美術館—アクセシビリティを高める多角的・多様な活用—」では、「社会に開かれた学校」「あらゆる人に開かれたミュージアム」ということが共同討議で話題となり、当館での取り組みの事例報告を受けて「ミュージアムが学校を開く扉・鍵になる可能性がある」という方向性が示された。また、外部有識者会議である運営協議会においても、美術館を社会や地域に開いていく一つの形として学校との連携が重要であるとの意見をいただいた。そこで、学校と美術館がともに開かれた姿を追求する一つの機会として「授業展—図工の時間・美術の時間—(仮称)」(以下、「授業展」)開催企画が動き出した。学校と美術館が双方向の対話を積み重ねることを重視した準備・検討会を4回経て、<授業展示><実験的な展示><次につながる展示>の3つをキーワードに「授業展」の大枠が決まりつつある。必修教科である「図画工作・美術」にスポットを当て、大人の物差しで選んだモノ(作品)の展示ではなく、障害の有無にかかわらずすべての子どもが学ぶ授業や子どもの学びの姿、学びから生まれたコトを展示する。また、子どもの学びが起こる授業の引き出しづくり研修会や、私たち美術館職員が「図工の時間・美術の時間」の学びやその姿を知るための学校訪問を随時開催し、学校と美術館が双方向で授業展に取り組む。その結果としての「授業展」は、そこに集うすべての人—今まさに学んでいる児童・生徒、昔学んだ市民(この中には保護者や私たち美術館職員も入る)、そして今教壇に立っている先生、これから教壇に立つだろう未来の先生である高大生等々—とともに今の「図工の時間・美術の時間」を考え、これからの「図工の時間・美術の時間」の姿を思い描く場である。序章で学校教育課程の中に位置づけられている図画工作・美術の歴史を、本章で今の姿を紹介すると同時に、外部講師による講座やギャラリートーク、「授業展」参加校の指導者や児童・生徒、かつて図画工作・美術を学んだ市民や未来の先生(高大生)との交流会等を通して、開かれた学校／開かれた美術館の姿を追求していきたいと大きな夢を描いている。

先日開催された岡山県小学校教育研究会図画工作部会幹事会・同中学校教育研究会美術部会支部長会で、準備・検討会の経過報告と意見交換の時間をいただいた。各会で学校現場の状況を鑑みた新たな課題の指摘や前向きな提案、温かい賛同があった。さらに学校と美術館とが連携し、互いに共感しつつ高めあうことができる場としての「授業展」実施を目指したいと思う。



図1. 保育園児の鑑賞プログラム



図2. 小学生の鑑賞プログラム



図3. 中学生の鑑賞プログラム



図4. 触察鑑賞プログラム

シーシキンとドイツ・ロマン主義、そして原田直次郎

橋村 直樹(学芸員)



イワン・シーシキン《雨の檜林》1891年 油彩・キャンヴァス © The State Tretyakov Gallery

雨煙る檜林の中を相合傘で寄り添いながら歩いている後姿の男女。男性はぬかるみを気にして下を向き、女性は泥で汚れぬようスカートを持ち上げている。二人の前を行くひとりの男性は、傘もささず大股で先を急いでいる。彼らが向かっている林の奥は白く霞み、林立する木々の様子は明らかではない。雨雲に遮られながらも陽の光が林の中まで届き、苔むした岩や草木の緑、水たまりを照らし、柔らかな陰影のコントラストを作り出している。明るい前景から白く霞む遠景まで檜林の広がりや湿潤な空気感によって表され、その雄大な自然の中を歩く人間の後姿がこの作品の詩情を高めている。まるで映画のワンシーンのようなこのロマンティックな風景画は、前号の美術館ニュースで紹介したクラムスコイの《忘れえぬ女》とともに、当館で4月27日より開催される特別展「国立トレチャコフ美術館所蔵 ロマンティック・ロシア」(～6月16日)の注目作品のひとつだ。

19世紀ロシア風景画の巨匠である作者のイワン・シーシキン(1832—1898)は、モスクワ絵画彫刻建築学校とサンクトペテルブルクの美術アカデミーで学んだ後、1862年から65年まで給費留学生としてドイツとスイスに留学した。ベルリン、ドレスデン、ミュンヘンを経て向かったチューリッヒでは、動物画家で風景画家のルドルフ・コルラーに師事し、デュッセルドルフ派の追従者であったコルラーから同派のロマン主義風景画を学んだ。その後シーシキンはデュッセルドルフに赴き、同派の風景画家ヨハン・ヴィルヘルム・シルマーの作品に典型的な、精緻な自然描写と理想的な構図を組み合わせる風景画の文法の理解を深めた。帰国後、後進の育成に励みながら、移動展覧会協会(移動派)の創設時

からのメンバーとして活躍したシーシキンは、自然の中で写生を繰り返し、ロシアの雄大な自然風景、とりわけ力強い森の風景を精緻に描いた作品を数多く残したことで、その巨躯と風貌から「ロシアの森の巨人」と綽名された画家であった。

本作を改めて見てみると、ドイツとスイスで獲得したデュッセルドルフ派のロマン主義風景画の文法が時を経ながらも用いられ、よりロマンティックな風景画へと発展していることがわかる。苔むした岩や檜の樹皮など個々のモチーフを詳細な自然観察のもと精緻に描き、霧に霞む檜林の中央に相合傘で歩く後姿の男女を置くことによって、写実的で、詩情性の高い理想主義的な風景画となっているのである。

ところで、光と陰影が対比された緑あふれる自然の中に後姿の人間を捉えた詩的な本作は、当館所蔵の原田直次郎の《風景》(1886)をどことなく思い起こさせる。原田の《風景》は、バイエルンの農家の庭先の実景スケッチをもとに、光と陰影を強く対比させながら、草上に遊ぶ後姿の子どもや聖霊を思わせる鳩など象徴的モチーフを描き足して牧歌的世界を演出した写実的かつ理想主義的な風景画である。1884年から足かけ3年ミュンヘンに留学した原田もまた、ドイツ・ロマン主義風景画を目にして学ぶところが少なくなかっただろう。本作と原田《風景》に共通して漂う詩情性の源は、ドイツ・ロマン主義のなごりの中に求めることができそうだ。ロシアのシーシキンと日本の原田、遠く離れた異国の二人の画家がドイツ・ロマン主義を介して思いがけず繋がった。

新収蔵品紹介

File 12

工芸 山本象石
福富 幸(主任学芸員)



《キンマ鼓篔 猫》昭和27(1952)年頃 縦23.3×横29.0×高23.8(cm) 本館蔵

複雑に色が混じり合った荒々しい毛並みに鋭くとんがった目と耳をもつ実にアーティスティックな猫が一匹、やってきました。住処は大胆に赤と黒に塗り分け、十文字の花に飾られた鼓篔。

山本象石は明治29(1896)年倉敷市下津井に生まれ、本名を信太郎といい、若い頃は犬養木堂に心酔し政治運動に熱を上げました。昭和の初め頃から久我小年に南画を、小野黄石から彫刻を学び、玉島某家で書画骨董類の整理にあたったことが美術工芸への関心を深めることになったようです。昭和16(1941)年から高松の漆芸家磯井如真に師事して漆芸技法を習得、同21(1946)年日展に初入選、同23—26(1948—51)年まで計5回入選を果たしました。しかしそれ以降は専ら茶道具制作に励み、表千家々元即中齊宗匠の知遇を得て「鷺山塗」と命名されました。ご寄贈いただいたご遺族のお話では金重陶陽が日本工芸会へ勧誘したが参画せず、木地は林鶴山から求めていたそうです。

児島市及び倉敷市文化賞受賞。児島市文化連盟会長、倉敷市文化連盟副会長、同顧問、児島市及び倉敷市選挙管理委員会委員長等を務め、同63(1988)年逝去。平成3(1991)年倉敷市立美術館において遺作展が開かれています。

《キンマ鼓篔 猫》は昭和27(1952)年日展最後の落選作、漆芸作品としては斬新で独創的です。一方《鷺山塗 久総彫基筭一对》は昭和38(1963)年第14回県展に招待出品したもので、器全面に菊花文を彫り込み技巧に富んだ作品ですが、やや古典的な印象を受けます。見比べることで作品づくりにおける趣味の転換を見て取ることができます。



《鷺山塗 久総彫基筭一对》昭和38(1963)年頃
高11.0×胴径15.0(cm) 本館蔵

展覧会スケジュール

3月
March

3月21日|木・祝| 14:00~15:30

美術館講座 「写生画vs文人画
—対立か融和か—」

講師 守安収(館長)
会場 講義室(先着70名) ※無料

3月15日|金|—4月21日|日|

【特別展】
山陽新聞創刊140周年・
岡山県立美術館開館30周年
江戸の奇跡・明治の輝き
—日本絵画の200年

本展は、江戸後期から明治にかけての個性豊かな作品180件を通して、日本絵画史にきらめく200年の輪郭を探ろうとするものです。江戸時代では、奇想の画家ともいわれる伊藤若冲や曾我蕭白から写生を重視した円山応挙まで、幅広い画風を生んだ時代の「奇跡」をご紹介します。明治時代では、日本画の礎を築いた橋本雅邦や横山大観から時代の旗手たる竹内栖鳳や菱田春草まで、激動の時代を生きた画家らの放つ「輝き」をご覧ください。

3月30日|土| 14:00~15:30

美術館講座 「江戸のグロテスクワールド」

講師 八田真理子(学芸員)
会場 講義室(先着70名) ※無料

4月
April

4月6日|土| 14:00~15:30

記念講演会 「江戸の奇跡に瞠目し、
明治の輝きを応援する」

講師 山下裕二氏(美術史家・明治学院大学教授)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

4月20日|土| 14:00~15:30

美術館講座 「明治の日本画壇～東西対決～」

講師 中村麻里子(学芸課長)
会場 講義室(先着70名)

5月
May

4月27日|土|—6月16日|日|

【特別展】
国立トレチャコフ美術館所蔵
ロマンティック・ロシア

モスクワにある国立トレチャコフ美術館は、創設者パーヴェル・トレチャコフによってその基礎が築かれた約20万点のコレクションを誇るロシア美術の殿堂です。本展では、クラムスコイやシーシキン、レーピンといった19世紀後半から20世紀初頭の革命前のロシアを代表する画家たちによる、ロシアの雄大な自然を描いた風景画やモデルの内面までも捉えた肖像画など、ロシア的ロマンにあふれる作品72点を紹介します。

4月28日|日| 14:00~15:30

記念講演会 「黄金のロシアに、われも、あり
—19世紀ロシア芸術の世界」

講師 亀山郁夫氏(ロシア文学者、名古屋外国語大学学長)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

5月25日|土| 14:00~15:30

美術館講座 「トレチャコフ美術館の
コレクションと
19世紀ロシア絵画」

講師 橋村直樹(学芸員)
会場 講義室(先着70名) ※無料

6月
June

6月1日|土| 14:00~15:00

記念演奏会 「弦楽四重奏で楽しむ
ロシア・クラシックの調べ」

演奏 岡山フィルハーモニック管弦楽団
メンバーによる弦楽四重奏

会場 2階ホール(先着210名、13:30より整理券配布)
※展覧会観覧券(使用済み半券可)をご提示ください。

文化財レスキューと黒住章堂

守安 収

昨年7月の大雨被災後、私どもが会長館を務めている岡山県博物館協議会(83館)は、岡山県文化財等救済ネットの一員として微力ながらも活動に参加しています。研修会も開催し、被害対応や防災に関する報告、協議を行うなど、さまざまな局面での博物館相互の連携に取り組んでいるところです。一方で岡山学芸員会議という任意団体もあり、30年以上にわたって100回を超える集まりを催して学芸員相互の研修や情報交換、親睦に努めています。こうしたことから岡山県下(広島県からも参加)の博物館同士の関係はますます良好といえるでしょう。▼さて、当館では去る12月から今年1月にかけて常設特別企画「黒住章堂」を開きました。章堂(1877-1943)は現在の岡山市北区一宮出身の画家ですが、開館30周年を迎えた当館での章堂作品の展示歴はなく、この度が初めての公開でした。展覧の発端は和歌山県立近代美術館から届いた情報で、市内の寂光院というお寺の庫裏が解体されることになり、同館を含む文化財の専門家(和歌山県立博物館、同市立博物館等)たちが緊急調査(+文化財レスキュー)を行ったところ、襖絵の作家が岡山出身者であることが判明したというもの。襖絵は市立博物館の収蔵庫に保管されていました。岡山にも江戸や明治・大正期の襖絵が遺されていますが、これほど大量でかつ画題が豊富、保存状態の良好なものは見当たりません。そこで、岡山でもぜひ公開をとお願ひし、長年寂光院をお守りされてきた小谷家や、保存管理に尽力された関係各館のご了解を得て、実現に至った次第です。WAKAYAMAの博物館相互連携は見事でした。音が似ていて時々混同されるOKAYAMAも頑張りましょう。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

年度末から新年度にかけて、「江戸・明治」展や「トレチャコフ美術館」展の準備が進むなか、同時に半年後、来年、あるいは再来年の展覧会の準備、さらに年に一度発行される美術館紀要の編集、新たに収蔵される作品の整理、館内外の設備の修繕など、いろんなことがめまぐるしく押し寄せる今日この頃です。そんな中、来年度の展覧会リーフレットの作成も始まっています。2019年度はどんな展覧会がおこなわれるのでしょうか？みなさまがこの館ニュースをお読みの頃には、もう発表されているかもしれませんね。ぜひウェブサイトでもチェックしてみてください。